

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名: 明日葉保育園相生園
施設所在地: 大田区西蒲田 6-18-8
法人名: 株式会社あしたばマインド

1. 活動のテーマ「食」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

昨年度、「食」をテーマに探求的な活動を行った際、子どもたちが主体的に関わり、目を輝かせて取り組む姿が多く見られました。食材に触れたり、栽培や調理過程の一部を体験したりする中で子どもたちは自ら気づきを得て学びを深めており、「食」は子どもの興味関心を引き出し、探求心へとつながりやすいテーマであることを実感しました。身近な食べ物であっても、家庭では触れる機会の少ない材料・工程・背景に触れることで学びが広がっていきました。

この経験を踏まえ、本年度も「食」を継続的なテーマとして位置づけ、すくわくプログラムが重視する「主体的・対話的で深い学び」を促す活動を計画しています。食材の背景や、なじみのあるメニューが完成するまでの過程を知るなど、子どもたちが「なぜ?」「どうして?」と問いをもち、自ら探求していける環境をつくることで、食への理解と生活につながる学びをさらに深めていきたいと考えています。

2. 夏野菜・冬野菜の栽培活動スケジュール

- 4月 幼児3クラス 栽培したい野菜を相談、決定。
- 5月 5歳児クラス各クラスで決まった苗を購入しに行く。
苗を植える。栽培スタート。
- 6月～8月 ぐんぐん野菜が育つ、実ったものから収穫。給食室へお願いして調理していただき給食で実食。
- 11月 4・5歳児クラス小松菜の水耕栽培スタート。
育てたい冬野菜を相談、決定。苗を購入。
- 12月 冬野菜の栽培スタート。
- 1月 小松菜収穫。給食室へお願いし調理していただき給食で実食。
- 3月 収穫できるものから収穫。給食室へお願いして調理していただき給食で実食。
5歳児クラスで<野菜を知ろう>を実施。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

・絵本、図鑑、紙芝居 ・パネルシアター ・野菜苗 ・プランター ・じょうろ

4. 探究活動の実践

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)を記入します。

夏野菜の栽培

活動の内容

- ・育てたい夏野菜をクラスで決める。
- ・5歳児クラスがお花屋さんへ苗を買いに行く。
- ・苗を植える。栽培スタート。収穫して実食。





<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

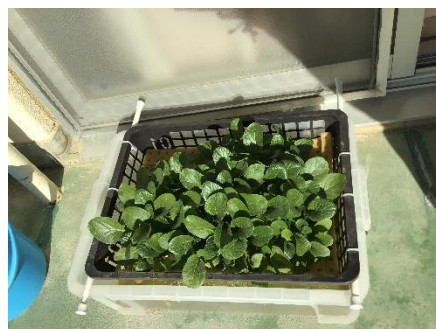
(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・事前にクラスで何を育てるかを話し合い決めた作物だったので興味をもって活動に参加していた。
- ・5歳児はお花屋さんへ他学年の分の苗も買いに行くことで使命感をもっていた。帰り道も袋の中の苗が倒れていないか何度も中身を見て確認する姿があった。
- ・苗を植える際には、「優しく持たないとね」「ここに土かけるんだよね」など友だち同士で声を掛け合いながら取り組み、保育者の説明を聞いて丁寧に植えようとする様子が見られた。
- ・水やりや観察を続ける中で、「葉っぱが大きくなった」「花が咲いてる」「小さい実ができてる」など成長の変化に気づき、友だちや保育者に知らせる姿があった。
- ・夏の暑さで作物が弱っていく姿も目の当たりにし、栽培の難しさを感じる時もあった。
- ・水の量や世話の仕方について「昨日あげたから今日は少しでいいかな」「元気ないから水あげよう」など話し合う姿があり、野菜の様子を見ながら考えて関わろうとしていた。

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・事前に子どもたちと話し合い、育てる作物を自分たちで決めたことで活動への意欲が高まり、日々の世話や観察にも主体的に関わろうとする姿が見られた。自分たちで決める経験が責任感や興味の継続につながることを感じた。
- ・苗の購入を年長児が担当したことで使命感が生まれ、苗が倒れないように気をつけながら大切に持ち帰る姿が見られた。役割をもつことで活動への関わりがより深まり、自分たちで育てているという意識につながっていた。
- ・苗を植える際には友だち同士で声を掛け合いながら丁寧に扱おうとする姿があり、保育者の話を聞きながら協力して取り組む様子が見られた。栽培活動を通して思いやりや協力する気持ちが育っていると感じた。
- ・日々の水やりや観察を続ける中で、葉や花、実の変化に気づき、自分から知らせる姿が見られた。継続して関わることで小さな変化にも気づき、関心が深まっていくことを感じた。
- ・暑さで作物が弱る様子を見て、育てる難しさや命の大切さを感じる場面もあった。水の量や世話の仕方を自分たちで考えようとする姿が見られ、経験を通して学びが深まっていると感じた。
- ・実ができ収穫できた時には大きな喜びが見られ、「給食で食べたい」「家に持って帰りたい」など食への関心にもつながっていた。自分たちで育てた経験が達成感や食べ物への大切さを感じるきっかけになっていた。
- ・今後も子どもたちが主体的に関わることができる栽培活動を取り入れながら、育てる喜びや難しさ、食への関心につながる経験を大切にしていきたい。

小松菜水耕栽培



<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・小さな小さな種を慎重に植える姿が印象的だった。
- ・種がひび割れて発芽したことに気が付きその様子を友だちどうして伝え合う姿があった。
- ・水換えも容器を持ち上げる人、水を入れる人。と分担、協力して行っていた。根っこがはりはじめ、水の色が変化していく様子にも気づき根っこにも興味を示す子がいた。
- ・青々と育っていくと収穫を楽しみにし、保育者に収穫の時期を確認することが多くなった。収穫の時は慎重に優しくハサミを入れ、収穫した小松菜を愛おしそうに愛でる姿があった。
- ・給食のメニュー(味噌汁の具)で提供すると普段野菜を食べない子も自分たちで育てた小松菜が入っているとわかると進んで口にしていた。

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・小さな種を植えるところから育てたことで、子どもたちは成長の変化に強い関心を持ち、発芽や根の伸びなど小さな変化にも気づき友だち同士で伝え合う姿が見られた。継続して観察する経験が気づく力や興味の深まりにつながることを感じた。
- ・水換えや世話をを行う際には、自然と役割を分担し協力して行う姿が見られた。共同で育てる活動を通して、友だちと関わりながら取り組む大切さや責任感が育っていると感じた。
- ・成長していく様子を見る中で収穫を楽しみにする気持ちが高まり、時期を確認したり大切に扱おうとする姿が見られた。自分たちで育てた経験が、作物への愛着や大切にすることを学んでいた。
- ・収穫した野菜が給食に使われると知ることによって喜びが大きくなり、普段は野菜が苦手な子も進んで食べる姿が見られた。育てる経験と食べる経験がつながることで、食への関心が高まることを改めて感じた。
- ・種まきから収穫まで関わることで、育てる楽しさだけでなく難しさや大切さも感じるようになった。今後も継続して関わることでできる栽培活動を取り入れ、命の大切さや食への興味につながる経験を大切にしていきたい。

冬野菜の栽培

活動の内容

- ・育てたい野菜をクラスで決める。
- ・苗を植える。栽培スタート。収穫して実食。



<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

・夏野菜の栽培と同様に、自分たちで育てたい作物を相談して決めたことで愛着をもって関わる姿が見られ、苗植えや水やりも丁寧に行おうとする様子があった。

・育てていたキャベツが鳥に食べられた形跡を見つけると、「誰が食べたの?」「どうしたら守れるかな」と友だち同士で話し合い、保育者にも相談しながらネットをかけるなど対策を考えて実行する姿が見られた。自分たちの作物を守ろうとする意識が高まっていた。

・冬野菜は成長がゆっくりで変化を感じにくい様子もあったが、毎日の水やりや観察を続ける中で「葉っぱ増えてる」「少し大きくなってる」など小さな変化に気づき、友だちや保育者に知らせる姿が見られた。

・気温や日当たりによって育ち方が違うことにも気づき、「寒いから元気ないのかな」「もっと水あげたほうがいいかな」など世話の仕方について話し合う姿があった。

・収穫の時期が遅れると大きくなりすぎてしまうことを知り、「早く取らないとだめなんだね」「ちょうどいい時があるんだね」と話す姿が見られ、育てる難しさを感じている様子だった。

・収穫の際には「折れないように」「優しく持ってね」と声を掛け合いながら取り組み、「自分たちで育てた野菜だね」「給食で食べたい」など達成感を感じている姿が見られた。

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・自分たちで話し合って育てる作物を決めたことで愛着が生まれ、日々の世話や観察にも主体的に関わる姿が見られた。自分たちで決める経験が責任感や継続した関わりにつながることを感じた。
- ・栽培中に鳥に食べられてしまう出来事があり、子どもたちが「どうしたら守れるか」を考え、保育者に相談しながら対策を行う姿が見られた。うまくいかない経験も含めて、育てることの難しさや工夫する大切さを学ぶ機会になっていた。
- ・冬野菜は成長がゆっくりで変化が分かりにくい時期もあったが、毎日の世話や観察を続けることで小さな変化にも気づき、自分から知らせる姿が見られた。継続して関わることで関心が深まり、気づく力が育っていると感じた。
- ・気温や水の量、収穫の時期によって生長が変わることを知り、「ちょうどいい時がある」「遅れると大きくなりすぎる」など栽培の難しさを実感する姿が見られた。実際に育てる経験を通して、作物が育つ過程への理解が深まっていた。
- ・収穫した野菜を見た時には達成感が大きく、「自分たちで育てた」「食べてみたい」と食への関心にもつながっていた。育てる経験と食べる経験が結びつくことで、食べ物を大切にすることが育っていると感じた。

野菜を知ろう

- ・ペープサート<野菜はどこになるのかな?>を使ってそれぞれの野菜が土の中、土の上どちらでなるのかを知る。
- ・実際の野菜を出して、土の中、土の上に分類する。
- ・並んだ野菜の季節について考え、春夏秋冬の4つのゾーンに分ける。
- ・季節ごとに分類した野菜のどこを(葉・根・実)食べているのかを考える。
- ・野菜に触れる。
- ・登場した野菜が題材の絵本を読む。



<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・自分たちが栽培した野菜に関しては土の上、土の中、季節などすぐに反応を示し答える姿があった。
- ・根っこや葉の部分を見せて何の野菜か質問をすると、根っこや葉など普段あまり見ることがない分、色や形から想像力を働かせて回答していた。
- ・季節に分ける際、それぞれの野菜で思い浮かべる料理を尋ねた。すると料理名→自分たちが食べた時期→その野菜の季節にたどり着く子が多かった。
- ・ペープサートで説明をした後、実際の野菜を提示し、実際の野菜で季節や食べている部分の分類分けをした。見て、触って、香りを嗅いで考える姿があった。
- ・大根は重い、きゅうりはがつつがある。レタスときゃべつは見分けがつきにくかったようだが実際に触ってみて葉の質感や重さが違うことに気が付いた様子。1枚1枚めくってはちぎっていた。
- ・たまねぎも茶色い皮から白い部分まで剥き続ける子がいた。
- ・野菜を見て触れた後の絵本タイムは、興味をもった野菜ものを選び取り読み込む姿があった。とまともにもいろいろな種類(品種)があることを知り、保育者に知らせる姿があった。

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・自分たちで栽培した経験がある野菜については、育った場所や季節をすぐに思い出し答える姿が見られた。実際に育てた経験があることで理解が深まり、知識として定着していることを感じた。
- ・根や葉など普段あまり見ない部分を見せると、色や形から想像して答える姿が見られた。実物に触れながら考えることで、想像力を働かせたり考えを言葉にしたりする姿につながっていた。
- ・季節分けの活動では、料理名や食べた経験から季節を思い出す姿が多く見られ、日常の食事経験が学びにつながっていることを感じた。食べた経験と結びつけて考えられるような問いかけの大切さを感じた。
- ・実際の野菜を見て、触れて、匂いを感じながら分類することで、見た目だけでなく重さや手触りの違いにも気づく姿が見られた。五感を使った活動を取り入れることで興味が高まり、集中して取り組む様子が見られた。
- ・似ている野菜でも触って確かめることで違いに気づいたり、皮をむいたり葉をめくったりしながら確かめる姿があり、自分で確かめる経験が理解につながることを感じた。
- ・活動後の絵本の時間でも興味をもった野菜について調べようとする姿が見られ、体験からさらに知りたいという気持ちにつながっていた。実物に触れる経験が探究心を高めることを改めて感じた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名：明日葉保育園相生園
施設所在地：大田区西蒲田 6-18-8
法人名：株式会社あしたばマインド

1. 活動のテーマ「食」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

昨年度、「食」をテーマに探求的な活動を行った際、子どもたちが主体的に関わり、目を輝かせて取り組む姿が多く見られました。食材に触れたり、栽培や調理過程の一部を体験したりする中で子どもたちは自ら気づきを得て学びを深めており、「食」は子どもの興味関心を引き出し、探求心へとつながりやすいテーマであることを実感しました。身近な食べ物であっても、家庭では触れる機会の少ない材料・工程・背景に触れることで学びが広がっていきました。

この経験を踏まえ、本年度も「食」を継続的なテーマとして位置づけ、すくわくプログラムが重視する「主体的・対話的で深い学び」を促す活動を計画しています。食材の背景や、なじみのあるメニューが完成するまでの過程を知るなど、子どもたちが「なぜ?」「どうして?」と問いをもち、自ら探求していける環境をつくることで、食への理解と生活につながる学びをさらに深めていきたいと考えています。

2. 乾物に触れる 活動スケジュール

普段の活動から：グループ会社から届く産地直送野菜に触れる機会や氷や寒天片栗粉などを用いた感触遊びを積極的に取り入れている。

1月～3月 乾燥わかめ・高野豆腐、ひじき、きくらげ、切干大根に触れる、戻してみよう。

乾物以外の素材に触れる活動も継続。

※高野豆腐とともに豆腐(きぬ、もめん)、油揚げ、おからに触れる
ふりかけづくり(いりごま・鰹節・のり)

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・絵本、図鑑 ・乾物いろいろ(わかめ、ひじき、きくらげ、高野豆腐) ・豆腐 ・油揚げ ・おから
- ・マロニー ・ボウル ・バット

4. 探究活動の実践

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)を記入します。

豆腐に触れる(きぬ・もめん)、油揚げ、おからに触れる

活動の内容

・0歳児

- ・木綿、絹の豆腐をつぶしたり、つまんだり、混ぜたりしてみる。
- ・おからを入れて混ぜて感触の違いを感じてみる。
- ・油揚げの感触を感じながら豆腐を詰めたり、ちぎったりしてみる。

・1歳児

- ・『とうふさんがね』の絵本を読む。
- ・活動の話をして子どもたちに興味をもってもらう。
- ・椅子に座り、保育者が見せる食材に触れてみる。また、匂いを嗅いでみる。

- ・種類の違う食材にも触れて、混ぜたり叩いたり、形を作ったりして楽しむ。
- ・カップの中や油揚げの中に豆腐やおからを詰めて楽しむ。

・2 歳児

節分の時期の開催だったため、節分の豆まきでまく豆が大豆であること。その豆から豆腐や高野豆腐が作られている事や種類などを簡単に保育者が説明してから行った。一人ずつに3種類の豆腐を皿に入れて渡して感触の違いを楽しんだ後、高野豆腐を水に浸してもどす過程を観察した。水に戻って柔らかくなった高野豆腐も使って再度、感触遊びを楽しんだ。



<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>
(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

0 歳児クラス

- ・豆腐を指で触ると嫌がる瞬間もあったが、積極的につぶしたり、混ぜたり、においを嗅いだりして感触を楽しんでいた。美味しいものと分かり、口に入れようとする姿も見られた。「気持ちいい」「冷たいね」「柔らかいね」など声を掛けると、言葉を真似する姿があった。

1 歳児クラス

- ・絵本を見て豆腐への興味を持ち、意欲的に椅子に座って感触遊びを楽しんでいた。
- ・普段感触が苦手な子どもも、食事で親しんでいる食材だからか興味を持って触っていた。
- ・保育者が「プルプルしてるね」「白くて柔らかいね」「いいにおいするね」等の声掛けに反応し、「プルプル!」「しろ!」等呟いたり、匂いを嗅いだりする姿が見られた。
- ・豆腐におからを混ぜると粘土のようになった。保育者がおにぎりの形を作ると真似をして握ったり、保育者に「おにぎり作って」と伝える姿も見られた。
- ・透明カップに混ぜた食材を入れたり、豆腐を詰めてその上に油揚げをトッピングしたりしておままごとを楽しんでいた。

2歳児クラス

・絹や木綿豆腐はそのまま、手で潰したり、握ったりして「冷たい！」「気持ちの良い！」「こっちの方がかたい！」など言いながらムニユとした柔らかさを楽しんでいた。また、豆腐を潰して液状になったものを「見て、豆乳！」と言い、友だち同士で見せ合う姿なども見られた。

・高野豆腐は水に戻す前の硬い状態と戻した後の柔らかい状態の差に驚いていた。また、柔らかくなった豆腐をちぎる事ができ、喜んでいました。

<振り返りによって得た先生の気づき>

・絵本や声かけを取り入れてから活動を行ったことで、豆腐への興味をもって触れる姿が見られた。普段食べている食材を使うことで安心して関わろうとする様子があり、身近な食材を使った活動の大切さを感じた。

・触る、つぶす、混ぜる、においを嗅ぐなど、五感を使って関わる中で「つめたい」「やわらかい」など言葉にする姿が見られた。保育者が感じたことを言葉にして伝えることで、子どもも真似して言葉にしようとする姿につながっていた。

・豆腐の種類や状態の違いに触れることで、硬さや感触の変化に気づき、友だち同士で見せ合ったり伝え合ったりする姿が見られた。実際に触れて確かめる経験が気づきにつながることを感じた。

・おからを混ぜて形を作ったり、容器に入れたりする中で見立て遊びやごっこ遊びにつながり、楽しみながら活動に参加する姿が見られた。感触遊びから遊びへ広がる活動の良さを感じた。

・感触が苦手な子どもも無理なく関わられるよう声をかけたり、保育者が一緒に触って見せることで少しずつ触れてみようとする姿が見られた。子どもの様子に合わせて関わることの大切さを改めて感じた。

・今後も安心して触れられる素材や身近な食材を取り入れながら、五感を使って楽しめる活動を大切にしていきたい。

乾物に触れる

活動の内容

0歳児

高野豆腐とわかめに触れてみる。水に戻る前の物と戻した後の物を触り比べてみる。一緒に水によって変化していく工程を観察していく。

それぞれ乾燥したものを触り、手触りやにおいを感じた後に水でふやかしたものを出して、違いを感じた。

1歳児

春雨…素手で触り、感触を楽しむ。カップを友だちと使ってごっこ遊びをする。

2歳児

①保育者が1人1人の手のひらにワカメを乗せ、乾燥をしている状態のワカメの感触を知る。

②硬さ、匂いなどはどうか児に問いかける。

③コップにワカメを入れ振ってみる。

④コップにぬるま湯を入れ、ワカメが変化をする様子を観察する。(色、匂い)

⑤お湯で柔らかくなったワカメを手に取り、感触を味わう。





<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>
(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

0 歳児クラス

- ・高野豆腐の感触を細かくちぎったり床に叩きつけたり、保育者を真似て手で絞って水が出てくる様子を楽しんだりしながら感じていた。
- ・水に浮いたわかめをカップに掬って感触を楽しんだり、手や顔に張り付けて楽しんだりする姿が見られた。
- ・素材の手触りやおいをそれぞれで感じていた。得意、不得意な手触りがあることに気付いていた。

1 歳児クラス

椅子に座って、集中して長時間カップを使ってごっこ遊びを展開する様子があった。最後は、自ら手洗いをを行う子が多かった。

2 歳児クラス

- ・まず、乾物を見た時に、すぐに「ワカメ！」と、答える児があり、それに続いて他児も口々に「ワカメ」と、言っていた。
- ・手のひらに乗せてもらおうと「かたい。」と言う児が殆どであった。保育者にどんな匂いか問われると、どの様に表現をして良いのか 答えに悩む児が多かったが、「海の匂いがするね。」との保育者の言葉で何となく想像が出来たようであった。「変な匂い」と、つぶやいている児もいた。
- ・コップにお湯を入れてもらおうと「(黒から)緑になった。」と、色の変化に気付く児がいた。「いっぱいになった。」と、量の変化に気付く児もいた。「ぬるぬるする。」と、触り心地を言葉で表現している児もいた。
- ・保育者が絆創膏のように手に貼る様子を見て真似をする児、一つひとつ小さなワカメをコップからトレイに器用に移す児、大胆に両手いっぱいに掴みギュッと絞りだす児など思い思いにワカメの感触を味わっていた。
- ・直接ワカメに触る事に抵抗を持つ児もおり、保育者がビニール袋に入れるとその上から触りグニュグニュ感を楽しんでいた。

<振り返りによって得た先生の気づき>

0 歳児クラス

- ・わかめも高野豆腐もただ触れるだけでなく、その乾物の特徴に気が付いてそれを楽しみながら遊んでいる姿があった。(例:高野豆腐…水を含んで絞れる、わかめ…張り付く事に気が付いて顔や手に貼ってみる)
- 感触の得意、不得意を感じる事ができていた。

1 歳児クラス

- ・席に座ると、ひとりひとりが集中して遊んでいる姿が見られた。保育者が触って遊んで見せると真似をしたり自分なりに考え工夫して遊んでいると感じられた。
- ・遊びに満足ができるよう時間にゆとりをもって保育を展開した。また、片付けの時間が近付いた際に、一度言葉掛けをし、気持ちの切り替えが行いやすいように配慮をした。

2 歳児クラス

- ・乾燥したわかめと水に戻したわかめの違いに気づき、「かたい」「やわらかい」「ぬるぬるする」「緑になった」など、自分の感じたことを言葉にする姿が見られた。実際に触れて変化を確かめることで興味や気づきにつながることを感じた。
- ・匂いや感触などをどのように表現したらよいか迷う姿もあったが、保育者が言葉で伝えることでイメージをもつことができ、子どももそれを真似して言葉にしようとする姿が見られた。言葉を添えて関わることの大切さを感じた。
- ・触り方にも個人差があり、大胆に触る子、少しずつ確かめる子、直接触ることに抵抗がある子など様々であった。ビニール袋に入れて触れるようにするなど方法を工夫することで、それぞれが無理なく参加できていた。
- ・カップに移したり、絞ったり、貼り付けたりと子どもなりに遊び方を見つけて楽しむ姿が見られ、素材の特徴を生かした活動は子どもの発見や工夫につながることを感じた。

その他、感触遊び

活動の内容

寒天、小麦粉粘土、春雨、にんじんに触れる、きのこに触れる、豆苗に触れる



<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・にんじんを見せ、保育者がピーラーを使って目の前で皮を剥くと興味を持って皮やにんじんに触っていた。保育者が「いい匂い！」と言うと真似をしてにおいを嗅いだり、皮をちぎったり手で握りしめていた。
- ・保育者がにんじんをすりおろし器ですりおろすと、すりおろしたにんじんを手で握りしめ、汁が出てきたことに驚く姿が見られた。またボウルに入れたものをにんじんで泡だて器のようにすりおろしたものをまぜている子どももいた。
- ・乾燥したきくらげを小さくしている時は「かたい」と言葉にする姿があった。これもきのこだよ。と伝えると驚く姿と共に水に入れて様子が変わるか観察をしていた。
- ・きのこの匂いが苦手な児もいたが、匂いが気になり何度も嗅いで五感で楽しむ姿もあった。
- ・しめじやえのきを裂き「おおきい、ちいさい」「ながい」と言葉にしながら並べていた。
- ・豆苗は、根っこや豆にも興味を持ち触るのを楽しんでいた。
- ・ふやかしたきくらげは「こんなにおおきくなったよ」と話すと「すごい」「おおきい」「ちょっとかわいい」と驚く姿があった。怖がりながらも1度触り平気な事が分かれると小さくちぎって感触の違いを楽しんでいた。



<振り返りによって得た先生の気づき>

・導入で見た絵本を見たこともあって、にんじんをみて「にんじん！」と喜ぶ姿も見られた。当日の給食の際、にんじんがでていたので「さっき触ったにんじんだね」と言う興味を持っているような反応も見られた。食育の経験を活かしながらの保育での声掛けを工夫していきたい。

小麦粉粘土遊びでは、捏ねる、千切る、伸ばす等をして遊びを楽しんでいた。また、色の名前を言ったり、粘土の色を混ぜてみたりして楽しむ様子も見られた。

・乾燥したきくらげを小さくしている時は「かたい」と言葉にする姿があった。これもきのこだよ。と伝えると驚く姿と共に水に入れて様子が変わるか観察をしていた。

・きのこの匂いが苦手な児もいたが、匂いが気になり何度も嗅いで五感で楽しむ姿もあった。

・しめじやえのきを裂き「おおきい、ちいさい」「ながい」と言葉にしながら並べていた。

・豆苗は、根っこや豆にも興味を持ち触るのを楽しんでいた。

・ふやかしたきくらげは「こんなにおおきくなったよ」と話すと「すごーい」「おおきい」「ちょっとこわい」と驚く姿があった。怖がりながらも1度触り平気な事が分かれると小さくちぎって感触の違いを楽しんでいた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名：明日葉保育園相生園
施設所在地：大田区西蒲田 6-18-8
法人名：株式会社あしたばマインド

1. 活動のテーマ「食」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

昨年度、「食」をテーマに探求的な活動を行った際、子どもたちが主体的に関わり、目を輝かせて取り組む姿が多く見られました。食材に触れたり、栽培や調理過程の一部を体験したりする中で子どもたちは自ら気づきを得て学びを深めており、「食」は子どもの興味関心を引き出し、探求心へとつながりやすいテーマであることを実感しました。身近な食べ物であっても、家庭では触れる機会の少ない材料・工程・背景に触れることで学びが広がっていきました。

この経験を踏まえ、本年度も「食」を継続的なテーマとして位置づけ、すくわくプログラムが重視する「主体的・対話的で深い学び」を促す活動を計画しています。食材の背景や、なじみのあるメニューが完成するまでの過程を知るなど、子どもたちが「なぜ?」「どうして?」と問いをもち、自ら探求していきける環境をつくることで、食への理解と生活につながる学びをさらに深めていきたいと考えています。

2. いどう果樹園いちご狩り活動スケジュール

例年：5月園の枇杷が実り始める

10月～11月園向かいのお宅の柿の実が実り始める。

登降園時や散歩に出た際、熟していき色が変わる様子を観察。

1月ケーキができるまで(全園児)の活動でデコレーションケーキにいちごをのせる
その際にいちごの香り、形、実際に食べて味を感じる。

いちごはどのように育つのか、関心をもつ

果物の絵本や図鑑を見る

2月 果物の絵本や図鑑を見て身近な果物がどのようにできているのか興味をもつ
ミックスジュースづくり(乳児)

3月 いどう果樹園 いちご狩り(全園児) 収穫体験

いちごはどのように栽培されているのか?

甘さの秘密。品種があることを知る。

いちごジャムづくり(5歳児)

ジャムに加工されるまでを観察。

糖度や重さを測る。断面を見る。

※当日の活動の様子は開催当日降園時、活動の様子を撮影したものをタブレットにて
スライドショーを公開。共有できるようにした。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・絵本、図鑑、紙芝居 ・配膳台 ・いちごカップ ・ボウル ・バット ・ガラス鍋 ・IHコンロ
- ・ミキサー ・スケール ・温度計 ・糖度計 ・ジュース

4. 探究活動の実践

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)を記入します。

ケーキができるまで

活動の内容

- ・デコレーションケーキの上に乗せる果物をいちごにし、デコレーションされるいちごを観察。
- ・粒の状態だけでなく、カットやスライスされた状態のものを観察する。
- ・実際にカットされたいちごを手に取り、感触や香り、実際に食べて味を感じる。



<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり> (活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

0 歳児クラス

- ・保育者が「まぜまぜだね」「ケーキ作ってるよ」と声をかけると、生クリームを混ぜる様子をじっと見たり、手を動かして真似をする姿が見られた。
- ・配膳台にあるいちごを見つけて「いちご！」と声を発する姿があった。
- ・いちごを飾ったりケーキが出来上がっていく様子を興味をもって見つめ、保育者の「いい匂いだね」「おいしそうだね」という声かけに顔を近づけたりうなずく姿があった。
- ・完成したケーキを見せると目を向けたり手を伸ばそうとする子どももあり、食べ物が出来上がる様子に関心をもっていた。
- ・活動後も掲示物を見て指差しをする姿があり、体験したことを思い出している様子が見られた。

1 歳児クラス

- ・使う材料のクイズでは「ぎゅうにゅう、いちご」と言葉にする姿がみられた。
 - ・いっぱい混ぜてるねと話すと生クリームを混ぜている時も拍手をしたり「がんばれ」と応援しながら集中して見ていた。
 - ・出来上がると「すごい」と喜び、出来上がったケーキをよく見ていた。
- 部屋に戻ってからケーキの絵本を読んだり、おままごとではお皿にケーキを入れてごっこ遊びを楽しんでいた。

2 歳児クラス

- ・部屋に入った瞬間のいちごの匂いに反応していた。パティシエが生クリームを混ぜている様子を目を輝かせ見せたり、一緒に混ぜる真似をしたり、拍手をしたり「がんばれ」と応援していた。スポンジにクリームが塗られ、いちごで飾り付けられていく様子に興味津々でハッピーバースデーの歌を歌い始める子もいた。

3 歳児クラス

- ・生クリームを泡立てる場面では自分たちも紙粘土で制作をした際にホイップを真似をしたことを思い出し、「やったことある！」と講師に声を掛ける場面があった。
- ・実際にクリームを絞るのに力が弱くうまく出せないことがあったが保育者に手を添えてもらい絞りはじめをともに行くと力加減がわかり絞ることが出来ていた。

4 歳児クラス

- ・生クリームを作る過程では、粘度が変わっていく様子を問い掛けサラサラの状態からどうなっていくのかを気づけるように声をかけると、泡立っている様子を注目し、変化に気づいていた。トッピングしている場面では完成に期待を持って見ていた。
- ・ビスケットにホイップクリームをトッピングする場面では、自分でトッピングする量を選び、ホイップクリームを絞っていた。自分でトッピングできることを喜び、食べるときには一口一口大事そうに食べている様子が見られた。

5 歳児クラス

- 実際パティシエに憧れている子も多く、材料の説明の場面ではホットケーキと同じ材料がいくつか使われていることに気付く子が多く、デコレーションされていく様子に釘付けだった。いちごの飾り切り、クリームの絞り方にもバリエーションがあることを工程を見る中で知った。回転台に乗せたスポンジの側面にクリームを塗る場面ではパテを使いクリームが一面に塗り広げられる様子に歓声が上がった。生クリームの泡立ては子どもたちが想像しているより時間がかかり常に泡だて器を動かしかき混ぜる姿に「大変そう」「手痛くない？大丈夫？」という声もあがった。制作中、毎日何個くらい作ってるのかな？という疑問が湧き、直接質問していた。その後の体験コーナーではクリームの絞り方や絞る場所、いちごの配置を丁寧に考えて進める姿があった。チョコペンでの文字書き体験も力の入れ加減でチョコの出方が変わり線の太い細いが出ることに気づいた様子だった。

<振り返りによって得た先生の気づき>

0 歳児クラス

- ・普段と違う環境に興味を示す姿が見られ、活動の内容よりも周囲の様子に関心が向く子どももいたが、ケーキ作りが始まり匂いがしてきたり、生クリームを混ぜる様子や出来上がっていく様子を見ることで次第に注目する姿が増えていった。
- ・実際に作っている様子を目の前で見ることで、食べ物ができていくことに気づき、手を伸ばしたり見つめたりと興味を示していた。見る・匂いを感じるなど五感を使った体験が関心につながることを感じた。
- ・活動後に部屋へ戻ってからも、導入で見た写真や掲示物を見て反応する姿があり、一度の体験でも印象に残っていることが分かった。繰り返し見たり思い出せる環境を作ることで、より興味や理解につながる感じた。

1 歳児クラス

- ・ケーキの絵本を見て、出来るまでの工程のどの場面かを見比べながら実際に作る様子を見ることができたことで、生クリームを泡立てている時もケーキを作っていると理解し、応援しながら見る事が出来ていた。
- ・いちごや生クリームでのデコレーション中もとても興味深く見る事が出来ており、質問にもよく耳を傾けて答えながら楽しんでいった。赤い果物は何だろうという問いかけに「りんご」「いちご」など言葉にする姿もあり、活動を通して言葉のやり取りが広がって良かった。

2 歳児クラス

- ・部屋に入った瞬間に匂いに気づく姿があり、視覚だけでなく嗅覚からも活動に興味をもって参加できていたと感じた。
- ・パティシエの動きを真似したり応援したりする姿が多く見られ、実際に作っている様子を間近で見ることで活動への期待や関心が高まることに気づいた。
- ・完成に近づくにつれて歌を歌ったり拍手をしたりする姿があり、工程と一緒に楽しむことで活動への一体感が生まれていた。実際の体験を取り入れることで気持ちの高まりにつながることを感じた。

3 歳児クラス

- ・以前の制作活動の経験を思い出しながら講師に話しかける姿があり、これまでの経験と結びつけて理解しようとする姿が見られた。事前の活動やこれまでの経験が活動への興味につながることを感じた。
- ・クリームを絞る場面では、保育者が手を添えることで力加減を知り、自分で出来たという達成感につながっていた。少し援助することで意欲や自信につながることを改めて感じた。
- ・実際に体験できる工程を取り入れることで集中して取り組む姿が見られ、見学だけでなく体験を取り入れることの大切さに気づいた。

4 歳児クラス

- ・生クリームの状態の変化に気づけるよう問いかけを行うことで、見た目や固さの違いに注目する姿が見られ、声かけによって気づきを引き出すことの大切さを感じた。
- ・完成までの過程を見ることで期待をもって活動に参加しており、工程を丁寧に見せることで興味関心が長く続くことに気づいた。
- ・自分でトッピングする場面では量や位置を考えながら行う姿があり、自分で選んで作る経験が満足感や達成感につながっていた。今後も自分でできる工程を取り入れていきたいと感じた。

5 歳児クラス

- ・材料や工程の違いに気づいたり質問をしたりする姿が多く見られ、年長児になると作り方や仕組みに対する関心が高まることを感じた。
- ・実際のパティシエの技術を見ることで憧れや興味がさらに強まり、もっと知りたいという気持ちから自分で質問する姿につながっていた。専門の方に見せてもらう経験の大切さに気づいた。
- ・デコレーションや文字書き体験では、力加減や位置を考えながら丁寧に取り組む姿があり、細かい作業にも集中して取り組めるようになっていると感じた。
- ・実際に見て、聞いて、体験する活動を取り入れることで探究心が高まり、より主体的に学ぶ姿につながると感じた。今後も工程が見える活動や体験できる活動を大切にしていきたい

ミックスジュースづくり

活動の内容

- ・紙芝居: フルーツジュースやさん 絵本: くだものどうぞ 他
- ・実際にミキサーを使ってジュースを作って、飲む
- ・ラップの上から切った食材を触って感触を楽しむ。
- ・ミキサーにかけて音やミキサーの中身が混ざっていく様子や色が変わっていく様子を観察する。
- ・完成したジュースを実際に味わう。





<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

・紙芝居を読んでいる間、【バナナ】など知っている果物を口頭で答えていた。

机で絵本に出ているものと同じ実際の果物を見て興味津々でのぞき込む姿や指でつんつんと押してみる姿があった。においを感じて笑顔になる姿があった。ジュースを飲んでみると果物の甘さやにおいを感じながら、大事そうに飲んでいった。

・ミックスジュースの手遊びや絵本、紙芝居でミックスジュースに興味を持つ姿が見られ、その流れから実際のジュース作りに活動に移すことで興味をもって参加する姿が見られた。

・材料を実際に見て、好きな果物だったり知っているものだったりして各々が「いちご!」「バナナだ!」と呟く姿が見られた。

・ミキサーで混ぜている間、手遊びに出てくる「ぐるぐる混ぜて」の振りをみんなで見ながら見ていた。

・牛乳の白が、果物の色でピンク色になったことに気づき、「ピンクになった!」と驚く様子も見られた。

・実際に完成したものを飲んで喜ぶ様子が見られた。

・活動後の食事の時間でもミックスジュースのことを思い出して、保育者に伝える姿も見られた。

・部屋に入った瞬間から果物の香りを感じたようで「いいにおい」と反応する姿があった。なじみのある果物が並んでいたの「いちごだ!」「バナナだ!」と身を乗り出して見学していた。手袋をして自分で選んでミキサーに果物を入れることで、自分たちも調理に参加している感覚がありミキサーが回転し中身が混ぜ合わさって行く様子に釘付けだった。色の変化にも注目し、「ピンクになった!」と声があがる場面があった。完成したミックスジュースを口にすることでそれぞれの果物の質感や味を舌で感じる事ができたようで「つぶつぶしてる」「あまい」と一口入れるたびに口の中で確認しながら味わう様子が見られた。

<振り返りによって得た先生の気づき>

・紙芝居や手遊び、絵本を取り入れてから活動を行ったことで、ジュース作りへの興味や期待をもって参加する姿が見られた。事前にイメージをもてるようにすることで、活動への関心が高まることを感じた。

・実際の果物を見たり触れたり匂いを感じたりする中で、知っている名前を言ったり笑顔を見せたりする姿があり、五感を使った体験が興味や理解につながることに気づいた。

・果物をミキサーに入れるなど簡単な工程に参加することで、自分も作っているという気持ち生まれ、集中して見たり応援したりする姿が見られた。乳児でも参加できる場面を作ることの大切さを感じた。

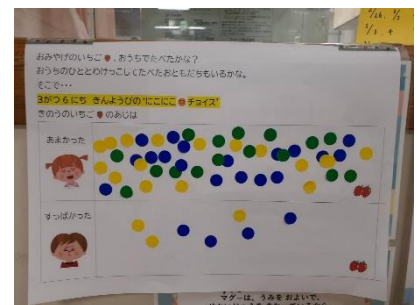
・色が変わる様子や味、におい、舌ざわりなどの変化に気づく姿があり、実際に見て・作って・飲む体験を通して活動の印象が深く残っていることが分かった。

・活動後もジュースのことを思い出して話す姿が見られたことから、実体験を伴う食育活動は興味や記憶につながりやすいと感じた。今後も五感を使って楽しめる活動を取り入れていきたい。

いちご狩り体験

活動の内容

- ・ケーキ作りでも登場したいちご。いちごはどのようになっているのかな？見てみよう。
- ・園庭(雨天時:1階保育室)にいちごの棚を設置、いちごについて話を伺うとともに、収穫の仕方を教えていただき実際に収穫と食べて味を知る。
- ・5歳児クラスは収穫したいちごを使っていちごジャムづくりを行う。(重さ、糖度を測る、断面を観察)完成したジャムを使っておやつ(ジャムサンド)を作り実食する。



くだものとうど	
すいか	11~12
メロン	10~12
みかん	12~18
レモン	7~10
ぶどう	18~20
いちご	6.0 9.6
	10.6 10.6
いちごジャム	41.6
あんこ	54.6
* さびらみぎ	16.7





<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>
(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

0 歳児クラス

- ・「いちご」や「赤」など自分の知っている言葉を話して興味を持っている姿が見られた。
- ・自分で採りたいイチゴを選んで指差して伝えることができていた。
- ・緑のイチゴを選んでいる際は、「まだ大きくなる途中だから赤いやつ選んでみよう」という保育者の声かけで赤いイチゴを選ぶことができていた。
- ・匂いを嗅いでいたため「甘い匂いがするね」という保育者にうなずいたり、自分で採れたことを保育者に身振り手振りで伝えようとしていた。
- ・実食することを喜び、「美味しい」と頬を叩いて伝えようとしている児がいた。また、果物が苦手な子どももいたが、他児や保育者と食べることを喜んでいた。

1 歳児クラス

- ・果物の絵本やジュース作りを通して「いちごだ」「食べたいな」等、いちご狩り体験に期待をもつ姿が見られた。
- ・農園の方や保育者の話をよく聞き、摘み取り方を模倣しようとする姿があった。
- ・成長途中のいちごを選択しようとする子どももいたが、保育者がまだ食べられないことを伝えると、気持ちを切り替えて赤いものを選びなおす姿が見られた。
- ・実食することを喜び「甘い」「すっぱい」等、味の感想を述べる子どももいた。また、果物が苦手な子どももいたが、自分で摘み取ったものを数口食べてみる姿が見られた。

2 歳児クラス

- ・摘み方の説明を聞きながら、その場で真似る姿があった。いちごの実だけでなく、花を見つけて指差し保育者に教える姿があった。大きい・小さい、赤い・白い、たくさんある中から自分なりにどんないちごが良いかをよくよく選んでいた。実際に摘む場面では教えていただいた動きをしっかりと実践していた。力が入りすぎて果実を握る形になってしまう場面もあった。
- ・保育室で食する場面では、自分で摘んだいちごを間近で観察しつづつづがあることだけでなく、産毛が生えていることに気づく子どももいた。

3 歳児クラス

- ・いちごについて話を聞く中でいちごが野菜ということを知り驚いていた。
- ・大きさや色をよく観察し、大きいいちごに驚きながらも収穫したいいちごを選んで摘んでいた。
- ・実際に摘み方を教えていただき摘む場面では力の入れ具合によって、果汁が溢れ手につき驚く様子があった、果実の硬さや柔らかさも知ることができた。複数個摘むうちに摘む際のちょうどよい力加減を知ることができたようだった。

4 歳児クラス

- ・いちごが野菜ということを知り驚いていた。
- ・大きさや色をよく観察し、収穫したいいちごを選んで摘んでいた。事前に話を聞いていた、いちごの粒が黄色いものと赤いものにも注目していた。
- ・イチゴが苦手な子ども匂いを嗅いだり、自ら食べてみたりしていた。
- ・「甘い」「おいしい」と話しながら嬉しそうに食べていた。家族のためにお土産にする児、その場で食べてしまう児と様々であった。「お土産にするつもりが美味しくて全部食べてしまった」話す児もいた。
- ・いちご狩り終了後、自分たちでいちごを育ててみたいと話ず姿があった。(後日、苗を購入し栽培スタート)

5 歳児クラス

- ・いちごの話ではいちごが野菜である。という話に驚きを隠せない様子だった。
- ・降園時、迎えに来た保護者にいちごは果物か野菜か?という問いかけをし、保護者が果物。答えるとなぜいちごが野菜なのかを説明する姿があった。いちご狩りでは事前に図鑑で品種や断面について調べていたこともあり、図鑑の中にある白いいちごに興味を持ち、赤いいちごではなくあえて白いいちごを摘む子がいた。
- ・スケールを使いたいちごの重さ比べでは、スケールの上にいちごを乗せては出た数値を口々に伝え合っていた。
- ・包丁を使って断面を見る場面では、いちご断面図鑑と見比べ、味のチャート表を見て自分たちが摘んだいちごはどんな味だったかを確認していた。
- ・ジャムづくりでは自分たちが摘んだいちごがジャムになるまでの様子を観察。糖度を測る場面では甘さを数値化することに関心が湧き、子どもたちから次々と比べたい果物の名前が上がっていた。火を通していくにつれて変化していくいちごの質感や香りの変化も敏感に感じ取っていた。

<振り返りによって得た先生の気づき>

振り返りによって得た保育者の気づき

0 歳児

いちご狩りの活動を通して、子どもたちは年齢に応じた興味や関心をもちながら主体的に関わる姿が見られた。0 歳児では、知っている言葉を発したり指差しや身振りで思いを伝えたりする姿が見られ、実際に見て触れる体験が言葉や表現の育ちにつながっていると感じた。また、保育者の声かけによって選択を変える姿もあり、関わりの中で理解が深まっていくことに気づいた。

1 歳児

事前の絵本や遊びでの経験が期待感につながり、実際の体験の中で模倣しながら行動しようとする姿が見られた。保育者の説明を聞いて気持ちを切り替える様子から、言葉の理解や自己調整の育ちを感じることができた。また、自分で摘み取ったことで苦手な食べ物にも挑戦する姿があり、体験の意味の大きさを実感した。

2 歳児

観察する力が育っており、大きさや色の違いだけでなく花やつぶつぶなど細かな部分にも気づく姿が見られた。実際に摘む中で力加減を学んでいく様子から、体験の積み重ねが学びにつながることを改めて感じた。

3 歳児

話を聞いて理解したことを実際の体験と結びつけながら試す姿があり、驚きや発見を通して学びが深まっていた。複数回経験することで自分なりに工夫したり調整したりする姿から、繰り返し体験することの大切さに気づいた。

4 歳児

事前に知ったことを活動の中で確かめようとする姿が多く見られ、自分で選ぶ・試す・感じるという主体的な姿が育っていることを感じた。また、苦手なものにも挑戦したり、家族へのお土産にしようと考えたりする姿から、体験が気持ちの成長にもつながっていることに気づいた。さらに、活動後に「育ててみたい」という声が上がったことから、実体験が次の学びへの意欲につながることを実感した。

5 歳児

事前に調べたことをもとに考えたり、数値や図鑑と照らし合わせたりしながら探究する姿が見られた。重さを比べたり断面を観察したり、甘さを数値で確かめたりする中で、子ども同士で伝え合いながら学びを深めていた。実際の体験と調べる活動を組み合わせることで、興味関心がより広がり、主体的な探究につながることに気づいた。

今回の活動を通して、年齢に応じた関わり方や環境の工夫によって、子どもたちの気づきや学びがより深まることを改めて感じた。また、事前活動・実体験・振り返りをつなげることで、子どもたちの主体性や探究心を育てることができると気づいた。今後も子どもが自ら見て、触れて、感じて、考えることができる体験を大切にしていきたい。